

白すみれとしいの木

小川未明

青空文庫

一

北きたの方ほうのある村むらに、仲なかのよくない兄きょうだい弟だいがありました。父ちち親おやの死しんだ後あとは兄あには弟おとうとをば、むごたらしいまでに、いじめました。

弟おとうとは、どちらかといえば、気きのきかない、おんぼりとした質たちで、学が校っこうへ行いつても、あまものごとり物事をよく覚えませんでした。だから、兄あには弟おとうとをば、つねにばか者ものあつか扱いかにしていたのであります。

弟おとうとは気がやさしくて、けつして兄あにに對たいして手向てむかいなどをしたことがありません。いつも兄あにに*いじめられて、しくしく泣ないていました。*

冬ふゆの、ある寒さむい寒さむい晩ばんのこと、格別かくべつ弟おとうとが悪わるいことをしたのではないのに、兄あには弟おとうとをいじめました。

「おまえみたいなばかは、こんな寒さむい晩ばんに外そとに立たつてゐるがいい。そして、凍こごえ死しんだつて、俺おれはおまえをかわいそうとは思おもわないぞ。」と、兄あにはののしりました。

弟おとうとは、どうかそんなことはいわずに、家うちの中なかに置おいてくれいと頼たのみますのを、兄あには無理むり

おとうとと 弟を戸の外に出して、かぎをかけてしまいました。

家の外は、野にも山にも雪が積もっていました。その晩は、めったにない寒さであつて、空は青ガラスを張つたようにさえて、星晴れがしていました。また、皎々とした月が下界を照らしていました。

弟は、雪の上に茫然としていますと、目から流れ出る涙までが凍つてしまうほどでありました。弟は、こんな不運なくらいなら、いつそ河にでも入つて死んでしまったほうがいいと思いました。

いつのまにか、寒さのために雪の上は堅く凍っていました。それは鋼鉄のように、飛び上がつてもカンカンと響くばかりで、埋まることはありませんでした。

弟は雪の上を渡つて、河のある方へいきました。すると、河の水もまた鋼鉄のように凍つていたのであります。

身を投げて死のうにも、水がないし、どうしたらいいだろうと思つて、途方に暮れていますと、はるかかなたに、きばのようにとがった高い山が、月に照らされて見えるのであります。

昔から、あの山の下には、鬼が住んでいるといわれていました。

二

弟は、どうせ死ぬなら、いつそ鬼にでも食われて死んでしまったほうがいいと思ひました。それにしても、何十里あるかわかりませんでした。

月光に照らされている、その遠い山影を望みますと、もし雪を渡つてまつすぐにいゝことができたならそんなに遠くもないだろう。駆けて、駆けていったら、今夜の中にもいゝかれないことはないと思ひました。

弟は、そう思うと、雪の上をひた走りに走りはじめたのです。河も野もどこも平坦な白い畳を敷き詰めたようでありましたから、どんな近道もできるのでありました。

彼は、駆けて、駆けて、駆けぬきました。そして疲れると、体から汗が出て、これほどの寒さもそんなに寒いとは思ひませんでした。彼は、ところどころ休みました。そして行く手にそびえて見える高い山を仰ぎました。月の光が、かすかにその山を浮き出しているのです。

弟は、ほとんど自分でも、どうしてこうよく走れるかわからないほど走りしました。そし

て、どこをどう走^{はし}つてきたかわかりませんでした。夜明^{よあ}けごろでありました。赤^{あか}い火^ひの球^{たま}が自分^{じぶん}の前^{まえ}になつて、雪^{ゆき}の上^{うへ}をころころと転^{ころ}がていきました。

彼^{かれ}は、これはなんだろうと思^{おも}いました。きつと魔物^{まもの}にちがいない。けれども自分^{じぶん}の命^{いのち}を惜^おしいと思^{おも}いせんから、それをつかまえようといつしようけんめいに跡^{あと}を追^おいました。すると火^ひの球^{たま}は、ころころと谷^{たに}底^{そこ}に転^{ころ}がり落^おちました。

彼^{かれ}も、火^ひの球^{たま}について谷^{たに}へ下^おりようとしますと、もはや夜^よが明^あけていました。そして、そこは路^{みち}もないまったく山^{やま}中^{なか}で、あのきばのように高^{たか}い山^{やま}は、まだ遠^とくなつて見^みえたのであります。

どうしたらいいかと思^{おも}つて、まごまごしていますと、その中^{うち}に日^ひの光^{ひかり}がさしてきました。雪^{ゆき}はしだいに軟^{やわ}らかくなつて、弟^{おとうと}は、もう一^ほ歩^{みう}も身動^{みうご}きすることができなくなりました。ちようどそこへ、薪^{たきぎ}を負^おつたおじいさんが通^{とお}りかかりました。そして弟^{おとうと}を見^みつけて、こんなところにな^{しょうねん}年^{ねん}がいたのでびつくりいたしました。

おじいさんは、この山やまなか中にただ一人住ひとりすんでいる不思議ふしぎな人間にんげんでありました。弟おとうとは、おじいさんの小屋こやにつれられてまいりました。

「こんな山やまなか中うちだけれど、なに不自由ふじゆうはない。長くここに住すめば、春はる、夏なつ、秋あき、冬ふゆ、いろいろの美うつくしいながめもあれば、楽たのしみもある。おまえはいいと思おもつたら、いつまでも住すむがいい。」と、おじいさんはいいました。ふもとには、温おん泉せんもわいていたのであります。そのうち雪ゆきが消きえて春はるになりました。弟おとうとは、故郷こきようが恋こいしくなりました。いまごろ兄にいさんはどうしていなさるだろうかと思おもいました。そのことをおじいさんにいいました。するとおじいさんは、木きの実みと草くさの種たねを弟おとうとに与あたえました。

「この草くさの種たねは、白しろすみれだ。おまえが、この種たねをまきながらいけば、またここへ歸かえつてくるような時じぶん分に白しろい花はなが咲さいているので路みちがわかる。この木きの実みは、おまえが腹はらが減へつたときに食たべるしいの実みだ。」といいました。

弟おとうとは、最初さいしよ、この山やまへくるときには、雪ゆきの上うへを渡わたつて一夜いっやにきましたけれど、雪ゆきが消きえてからは、森もりや、林はやしや、河かわがあつて、五いつか日も六むいか日も歩あるかなければ、自じぶん分の生うまれた村むらに歸かえることができませんでした。彼はかれ、木きの実みと草くさの種たねをもらつて、出しゅつ発ぱつしたのであります。そしてある日ひの暮くれ方がた、彼かれは、ようやく懐なつかしい我わが家やへ歸かえつたのであります。

「兄にいさん、ただいま帰かえりました。」と、弟おとうとはいつて、敷居しきいをまたぐと、なにかしていた兄あには、びっくりして振り向むいて、

「おまえは、まだ死しななかつたのか。もうおまえみたいなばかには用事ようじがないから、さつさと出でていけ。」といつて、弟おとうとは、取りつく島しまがなかつたのです。

「自分じぶんの真ま心こころがいつか、兄にいさんにわかる 때가 ありう。」と、弟おとうとは、一ひとつ粒つぶのしいの実みを裏庭うらにわに埋うめて、どこへとなく立ち去さりました。

兄あには、その後白すみれの花はなを見みて、いじらしい花だと思おもいました。そして、弟の姿すがたを思おもい出だしました。また、しいの木きに風かぜの当あたるのを聞きいて、悲かなしいと思おもい、弟おとうとをいじめたことを後悔こうかいしたそうです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「読売新聞」

1920（大正9）年1月9～10日、12日

※表題は底本では、「白《しろ》すみれとしいの木《き》」となっています。

※初出時の表題は「白堇と椎木」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白すみれとしいの木

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>